

令和3年度歴史資料講座

嘉永3年の水害と倉敷

令和3年10月3日(日)

倉敷市総務課歴史資料整備室長

山本太郎

目次

1. はじめに
2. 嘉永3年の水害
 1. 現在の真備地区
 2. 軽部
 3. 倉敷・早島
3. 倉敷村の豪農商・大橋正直の日記
4. 被害
5. 復旧工事
6. 救恤
7. おわりに

1 はじめに

× 研究史

- + 小野敏也「解題」『日本農書全集67 災害と復興2』（社団法人農山漁村文化協会，1998年）
- + 『新修倉敷市史 第四巻』（倉敷市，2003年）
- + 黒瀬英樹「高梁川嘉永洪水絵図を読む」（上）（下）『広報はやしま』2019年6月・7月号
- + 畑和良「真備町域における江戸時代～明治初年の水害治水史」『倉敷の歴史』30号，2020年
- + 倉地克直「嘉永三年東高梁川洪水と岡山藩領児島郡村々」『倉敷の歴史』31号，2021年
- + 倉地克直「嘉永四年の東高梁川堤普請と地域社会の動向」『岡山県立記録資料館紀要』第16号，2021年

1 はじめに

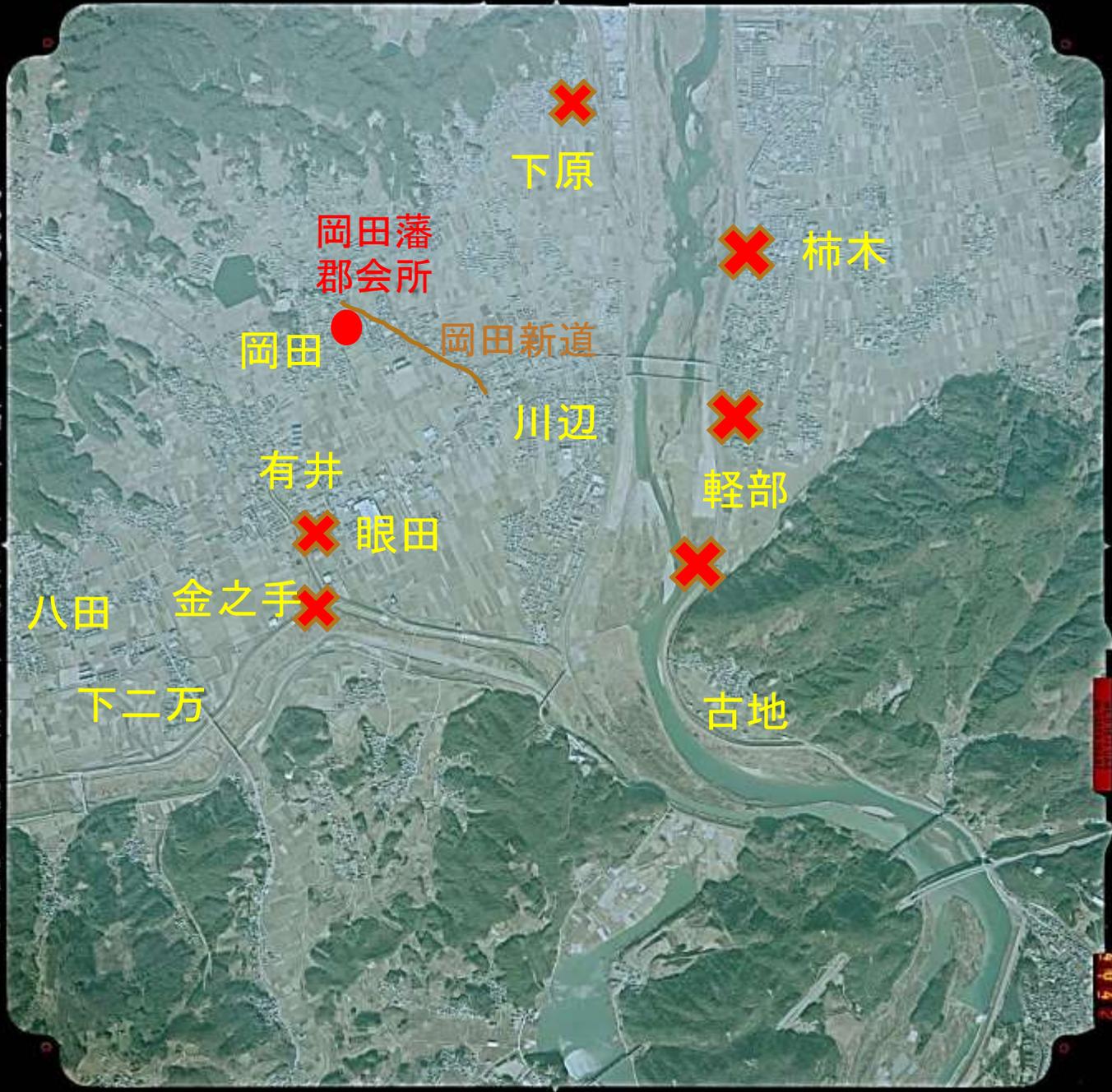
× 本報告のねらい

- + 現在の真備地区，軽部，倉敷・早島の状況を一連のものとして検討する。
- + 倉敷中心部の浸水状況を大橋家の日記から明らかにする。現在の場所に比定。
- + 倉敷村の御用留等から幕府領3カ村（安江村・沖村・倉敷村）の被害・復旧工事・救恤の状況を重点的に検討。

2 嘉永3年の水害 (倉敷市所蔵亀山家文書58)



C CG-89-IX | CII-I | 1:21 PA 3950



1990年 国土地理院空中写真
CCG891X

2-1 嘉永3年の水害 現在の真備地区

- × 5月28日・29日は雨天で、6月1日晚は大洪水になった。川辺・有井の新堤防とつながる有井村の上流の土手(眼田谷川堤。末政川の左岸堤防)長さ70間(約127メートル)は、今年4カ村(川辺・有井・辻田・岡田)で嵩上げをする予定だったが、田植えに差し支えるので、田植えが済んでから早々に工事に取り掛かろうと相談して決めていた。その場所が危険な状態であるとの有井村役人からの急報を受け、晚七ツ半(午後5時頃)過ぎ岡田・辻田・川辺から空き俵をかついだ人夫が駆けつけたが、もはや手のほどこしようがない状態で、押し切られた土手を水嵩が増した河水が乗り越え、新土手は水底に沈んだ。

2-1 嘉永3年の水害 現在の真備地区

- × この事態を受けて、岡田新道へ土俵3俵ずつを築き立て、その外岡田への入口6カ所にそれぞれ手当をし、夜間は高張提灯を掲げた人夫等を張り付けて陣屋町流入に備えた。ところが同夜五ツ時頃(午後8時頃)、今度は有井金の手西堤防(小田川北堤と末政川西堤の接続部角地)が決壊し、河水が下二万と両八田郷中(岡田藩領八田村と岡山藩領矢田村)へあふれた。6月1日夜、(大庄屋太田卯平太が)郡会所2階から眺めると、下原土手・川辺堤・古地・有井一帯に数百丁の提灯・篝火が見えた。その日の夜のうちに岡山藩領の柿木村(総社市清音柿木)の高梁川左岸堤防も決壊した。



旧岡田藩郡会所(真備ふるさと歴史館所蔵写真)

2-1 嘉永3年の水害 現在の真備地区

- ✖ 翌2日朝、(卯平太は)岡田から船で川辺へ渡った。(すでに一帯が湖水のようになっていた。)眺めたところ、洪水が高梁川堤防を越えて下原村へ差し込み、下原村人家へことごとく押し込んでいる様子が見えた。川辺へ着き新波止堤から望見すると、柿木村の高梁川堤防がおよそ3町(約330メートル)ほども決壊しているのが見えた。

2-1 嘉永3年の水害 神楽土手

源福寺



明寺（もと蔵鏡寺、
現川辺小学校）

金毘羅

（倉敷市所蔵永山家文書8-34）

2-1 嘉永3年の水害 現在の真備地区

- × 1日夜から2日晚までは川辺・岡田周辺は「岡田新道御制札」の軒端の高さまで浸水しており、3日朝は水嵩が4尺（約121センチメートル）ほど減ったが、25年前の戌年（文政9年）洪水よりは1尺5、6寸（約45～48センチメートル）も浸水が深かったと皆が言っていた。また3日朝は雨天だったが、昼から晩には雨も降り止んだものの、同夜五ツ（午後8時頃）出水し、川辺の新波止が決壊の危機に瀕した。奉行まで出張し、本庄村・市場村から加勢に多人数が出て決壊を防ぎ止めた。

2-1 嘉永3年の水害 現在の真備地区

- ✕ 同夜には高梁川下流の安江村あたりの堤防が2カ所決壊し、倉敷新田まで出水し、町家・在所とも大洪水になった。倉敷新田の植田武右衛門宅は座上6尺（約182センチメートル）余りが水没した。岡田藩領では外に服部村瓦焼前の1カ所、尾崎村の西分沖数カ所の大堤が破損した。
- ✕ （畑和良「真備町域における江戸時代～明治初年の水害治水史」『倉敷の歴史』第30号，2020年）

- ・6月1日から前代未聞ともい
べき大水で所々の堤などが切れ
込み岡田藩領の嘆き悲しみは
並大抵ではありません。
- ・しかしながら、川辺川東通りの
村々はとりわけ大変です。流家・
潰家・死人などもあると聞きます。
- ・岡田・川辺は皆出て防いだの
で、まず無難でした。

既去ル

朔日方前代未聞共可申候大水

所々堤等切れ込領分中之愁傷

大方ならつ、乍去川辺川東通

村々者別而之大変ニ御座候、流家・

潰家・死人等も有之由、岡田・

川辺者皆々罷出防方いたし

候付、先ツ無難ニ御座候、

・しかしながら私共は四方が水で池の中に祭られている弁天様のようになり、出仕も去る29日から5日まで船で行来しました。同情してお察してください。いずれ遠からず参上してお目にかかり申し上げます。水の中に入っているので御出のことは固くお断り申し上げます。このことは悪しからず御承知ください。

乍去私共ハ

丘水ニ而四方弁天与相成、出仕も

去ル廿九日方五日迄船ニ而行来

いたし候、御憐察可被下候、いづれ

不遠内参上御目通可申上候間

入水中必々御出之儀者御断

申上候、此段不悪御承知可被下置候

・江戸の旦那からも通知されたことがあるので、念を入れて参上し詳しい事情を申し上げます。御出のことは固くお断り申し上げます。その訳は水の中に入っており非常に忙しくまだ二階に住んでいます。同情してお察しく下さい。

江府旦那方も申達候儀御座候間

呉々も参上委細可申上候、必々御出

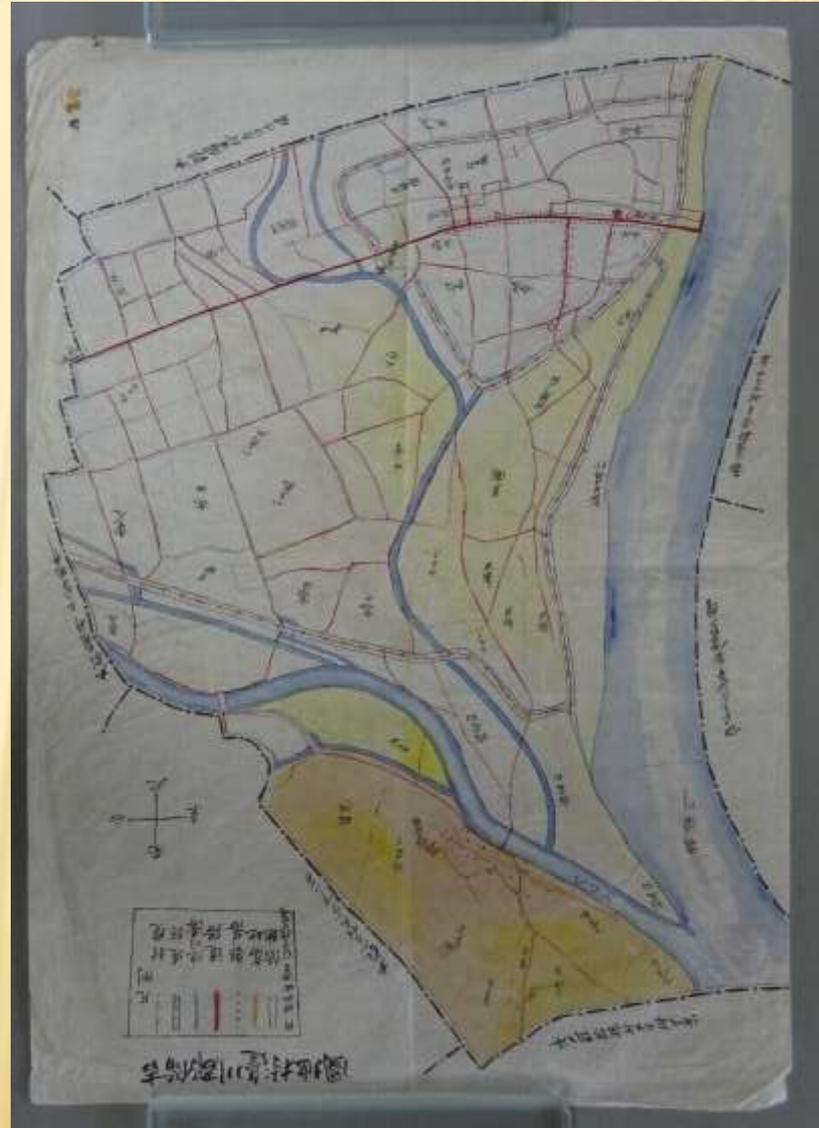
之儀者御断申上候、其訳入水

中、大取込未タ二階住居二御座候、

御憐察可被下候

2-1 嘉永3年の水害 神楽土手

- ✕ 吉備郡川辺村
地図
- ✕ (明治33年～
明治42年)



(倉敷市所蔵永山家文書8—34)

2-1 嘉永3年の水害 神楽土手



源福寺

明寺（もと蔵鏡寺、
現川辺小学校）

金毘羅

（倉敷市所蔵永山家文書8-34）

2-1 嘉永3年の水害 神楽土手



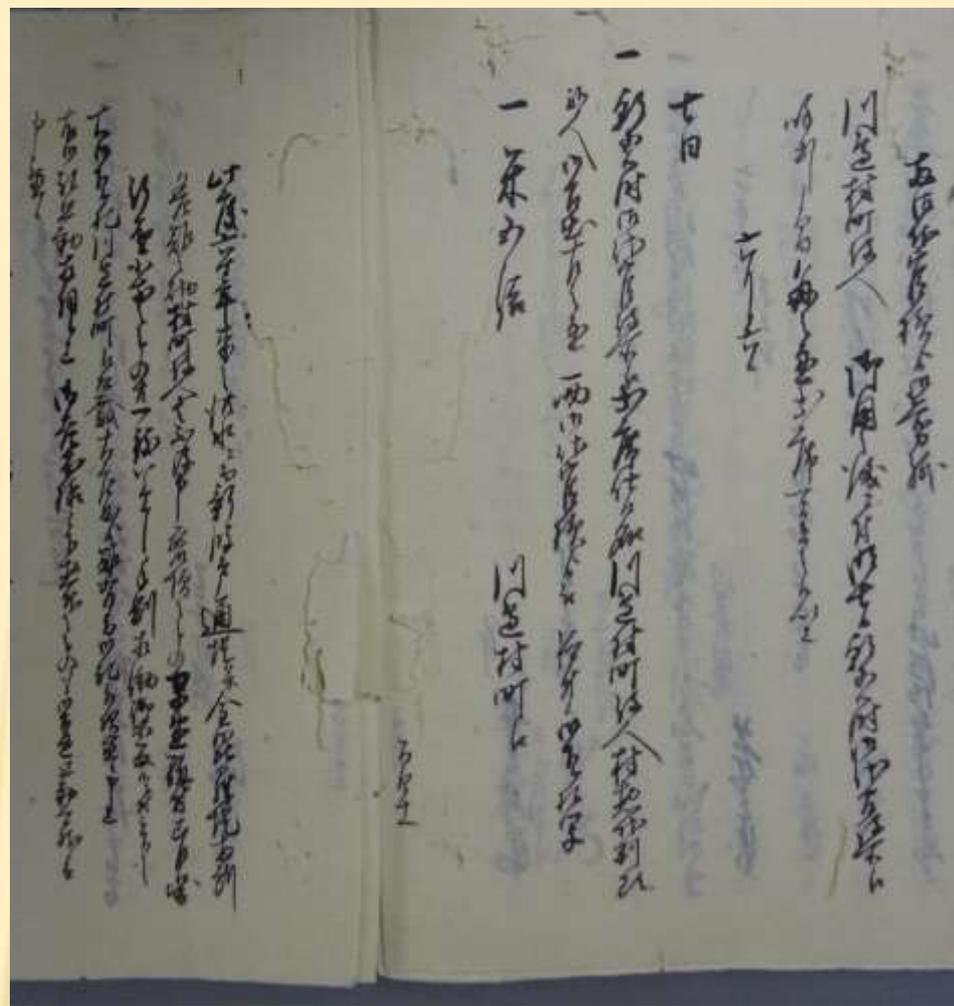
源福寺

(令和3年5月7日)

真備公民館川辺分館の南の道



「両御代官様」から川辺村町役人へ代官役所へ呼び出しがあり、6月7日に川辺村町役人・村惣代・判頭2人が出席すると、「六十年來」の洪水に新波戸通堤と金毘羅堤が危なかったとき、村町役人はもちろん大方の者が駆けつけ一致して働き堤防を守ったことに対して米5俵を下賜された。→凌げたのは神仏の加護のおかげと考え、5俵のうち1俵を助勢してくれた市場村へ送り、残り4俵は「蒸物」にして村祈祷のとき、酒など用意し参詣者に一つずつ配ることで小前の者まで行き届くようにした。



倉敷市所蔵太田家文書5-A-10

(畑和良「真備町域における江戸時代～明治初年の水害治水史」『倉敷の歴史』第30号, 2020年))

2-2 嘉永3年の水害 軽部

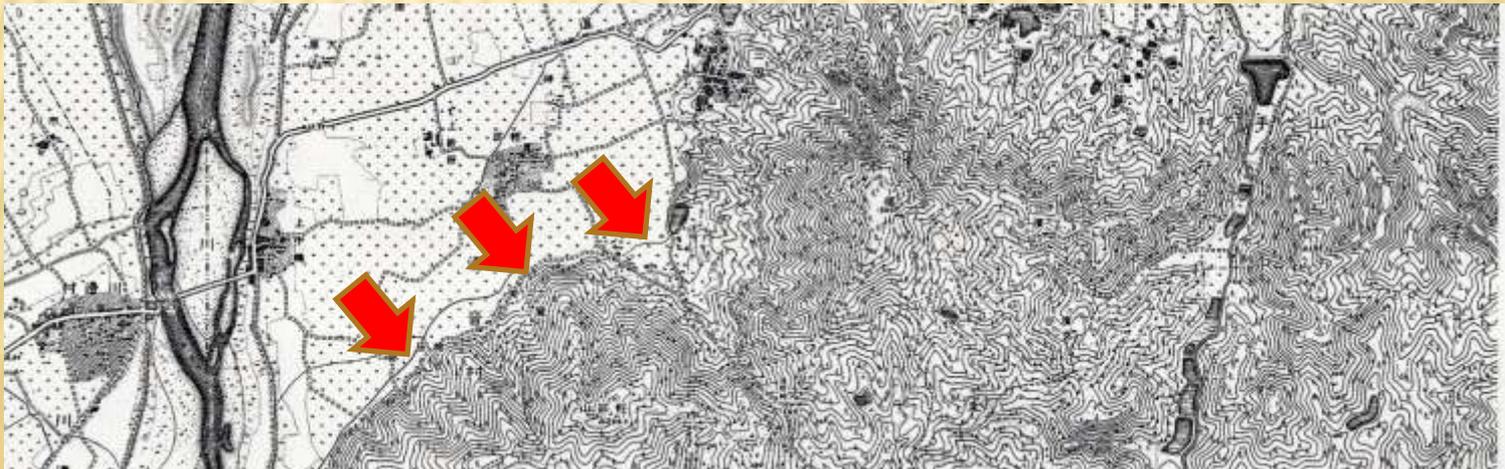
- ✕ 5月27日の朝雷鳴がとどろいた。それから昼夜を問わず雨が降り続き、6月1日の夕七つごろ（午後4時ごろ）に柿木村（総社市清音柿木）の堤防が170間（約300メートル）ばかり決壊し、まもなく軽部村（総社市清音軽部）分の堤防が160間（約290メートル）あまりも決壊、南の古地村（総社市清音古地）前の軽部村が管理している新堤防も20間（約36メートル）ほど決壊、合計3カ所も破損した。前代未聞の大洪水だった。

2-2 嘉永3年の水害 軽部

- ✕ 村中大騒ぎになって、家財を片付けるまもなく、軽部村は南北から湛水して大海のようになった。村内でも低地にある屋敷は棟まで水が来て、軽部村は均して軒端の上あたりまで冠水した。家の二階でさえ恐ろしくてとてもおられないので、みな破風や屋根に穴を空け、あるいは窓を壊して屋根の棟に上がり、「助舟々々」と泣きながら救助を求めた。

2-2 嘉永3年の水害 軽部

- ✖ 軽部・柿木村の者は残らず救助の船で小屋・峠・大覚・惣田の高台へ避難した。
- ✖ 下軽部集落は離れているので救助の船も来なかったが、昨年小舟を4, 5人が共同で買っておいだったので、小舟で人や牛を助けて回ることができた。



国土地理院発行二万分一
地形図(川辺村)明治三十
年測図をもとに作成

2-2 嘉永3年の水害 軽部

- × 6月2日の朝から下軽部の人々は惣田へ避難した。惣田の集落で無事だった2, 3軒に120~130人ほども集まった。食物がなく空腹に悩まされた。村名主は若者に船で三輪村へ救援を求めに行かせ、大庄屋や村役人は平田船で被害を見て回った。
- × 6月3日には「惣社西鍋屋」という白いのぼりを立てた救援の船が来て、握り飯と茶を差し入れた。それを食べ、皆生き返った思いがしてうれしかった。

2-2 嘉永3年の水害 軽部

軽部村の判頭が書いた「水損難渋大平記」によると軽部村が浸水したとき、6月3日に福山の上に倉敷など山南から大勢の連中がお茶、弁当や酒肴持参で見物に来ていて山は人でいっぱいだった。水没した地域を見下ろしてよい眺めと歓声をあげているのはもってのほか。「ことわざにも今日は人事、明日は我が事」というたとえもある。いつかお返しをするときもあろうと泣く泣く帰った。



令和2年12月30日

2-2 嘉永3年の水害 軽部

- ✕ 6月4日の昼，一家の主人はほとんど家へ帰り，濡れたものの片付けをした。
- ✕ 昼過ぎ，宍粟村の塚本屋が平田船で握り飯をたくさん持参，浅原村安養寺からも握り飯の差し入れ。村中がもらって命を繋いだ。惣社の井出屋から米30俵が，西郡の泉屋から白米30俵が陰徳として村役場へ持ち込まれた。これは藩庁へ指示を仰ぎ，ほとんどの村役人や判頭は分配を辞退した。

2-2 嘉永3年の水害 軽部

- ✦ 西鍋屋の夫人から陰徳として、家ごとに銀4分ずつもらえた。惣社の塩屋から醤油が、角清水屋から醤油の実が、元清水屋から紙袋に入った干海老が、子位庄の龍昌院からは白米が配られた。柿木・中島・軽部の3カ村の沖へは、救援の船が諸方から多く来た。

2-2 嘉永3年の水害 軽部

- ✕ 軽部村の被害は本屋の流出や倒壊が26, 7軒, 長屋などの建物をあわせると100軒余りが破損した。
- ✕ 藩庁からの救米は軽部村へは45俵。ほとんどの村役人や五人組頭は頂戴しなかった。「**村方に高き賤しき隔てなく なんきするのハ同じ事かな**」
- ✕ 救米で何とか生活し, また破堤改修人夫に対する賃金としての米の前借りも認められ, 8月8日に郷蔵で引き渡しが行われた。普請が始まれば人足として働こうと考えている者たちはほっと一息ついた。

2-2 嘉永3年の水害 軽部

- ✕ 柿木村の堤防が完成してから、8月7日に軽部村の堤防工事に着工した。あちこちから平均すると1日7,800人の人足が集まり、思ったより早く工事は完成した。
- ✕ 水災後物価が高くなり、なおさら難儀が増した。工事人足に出られない虚弱な者は、餓死を待つばかりであった。女子の家業は何もなかった。
- ✕ 朝夕は霧が深く、少し遠くは視野がきかない。源平合戦以来のことである。柿木・中島・軽部の沖には救援の船がここへ10艘、あそこへも20艘とやってきた。大庄屋は山の麓の小屋村で指揮し、見物人たちは福山・向山へたくさん集まり、軽部・中島両村の者は「飢えます、飢えます」と空腹を訴えて大声を出した。
- ✕ 「水損難渋太平記」『日本農業全書 67 災害と復興2』農山漁村文化協会、1998年)

2-3 嘉永3年の水害 倉敷・早島

- ✦ さらに東高梁川が満水になり、6月3日夜に安江村の元庄屋四郎右衛門宅後ろの左岸堤が30間(約54^トル)ほど切れ、さらに安江村下手左岸堤と四十瀬村の左岸堤も80間(約145^トル)ほど切れた。このため川の東側の約60カ村の土地へ濁流が流れ込み、一面湖水を湛えたようになった。
- ✦ 現在の倉敷市安江から岡山市汗入・内尾あたりまで水が及んだ(東西約10km)。
- ✦ (『倉敷市史 第五冊』p46～47, 「嘉永三年戌六月大水記録」(倉敷市所蔵難波家文書22-1), 「高梁川嘉永洪水絵図」『早島の歴史 3』付録, 「高梁川嘉永洪水絵図を読む(上)(下)」『こうほう早島』2019年6・7月号)

2-3 嘉永3年の水害 倉敷・早島



大日本帝国陸地測量部発行二万分一地形図(川辺村)明治三十年測図をもとに作成

2-3 嘉永3年の水害 倉敷・早島



大日本帝国陸地測量部発行二万分一地形
図(倉敷)明治三十年測図をもとに作成



東高梁川跡

出典：国土地理院電子国土Webをもとに作成

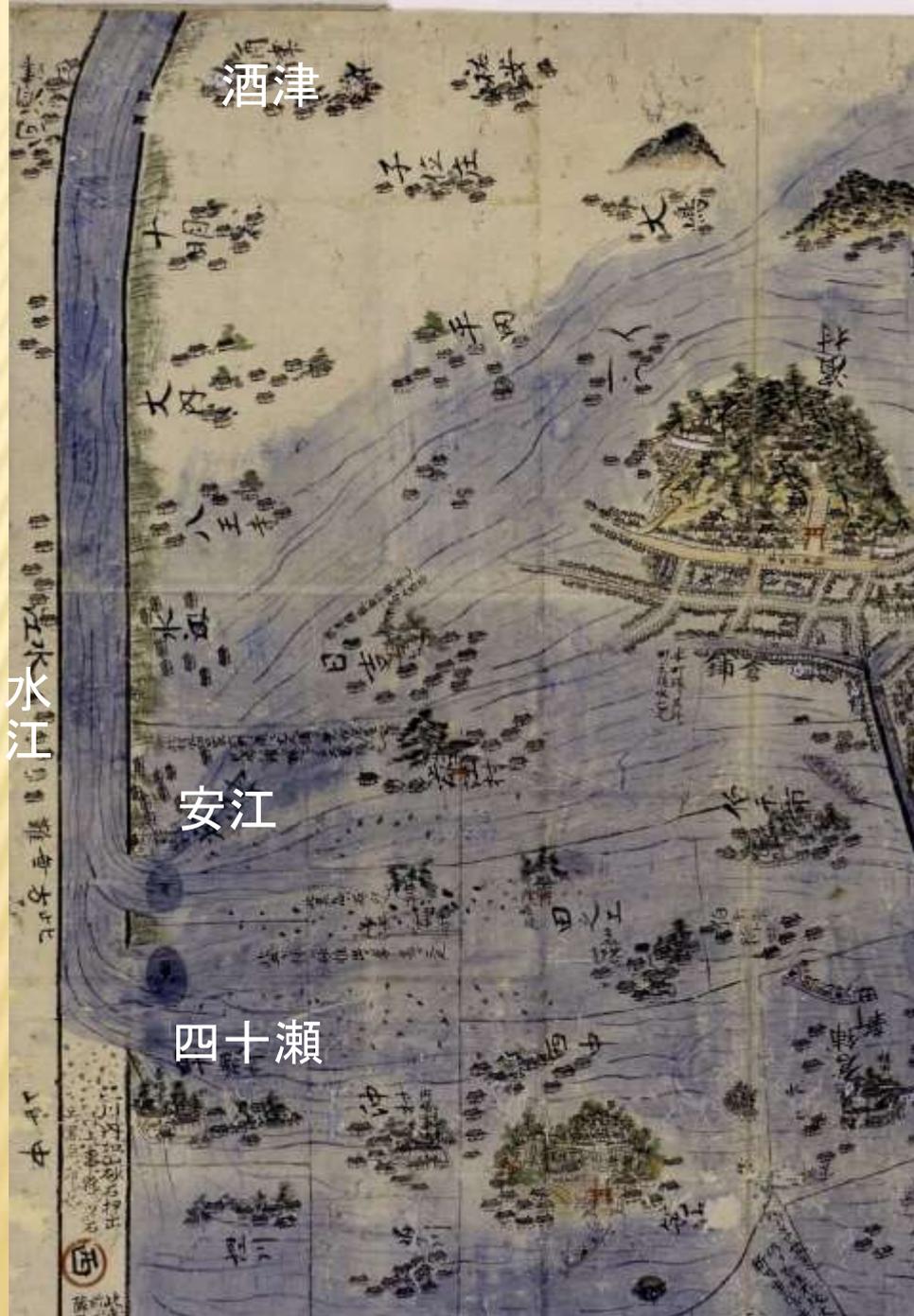


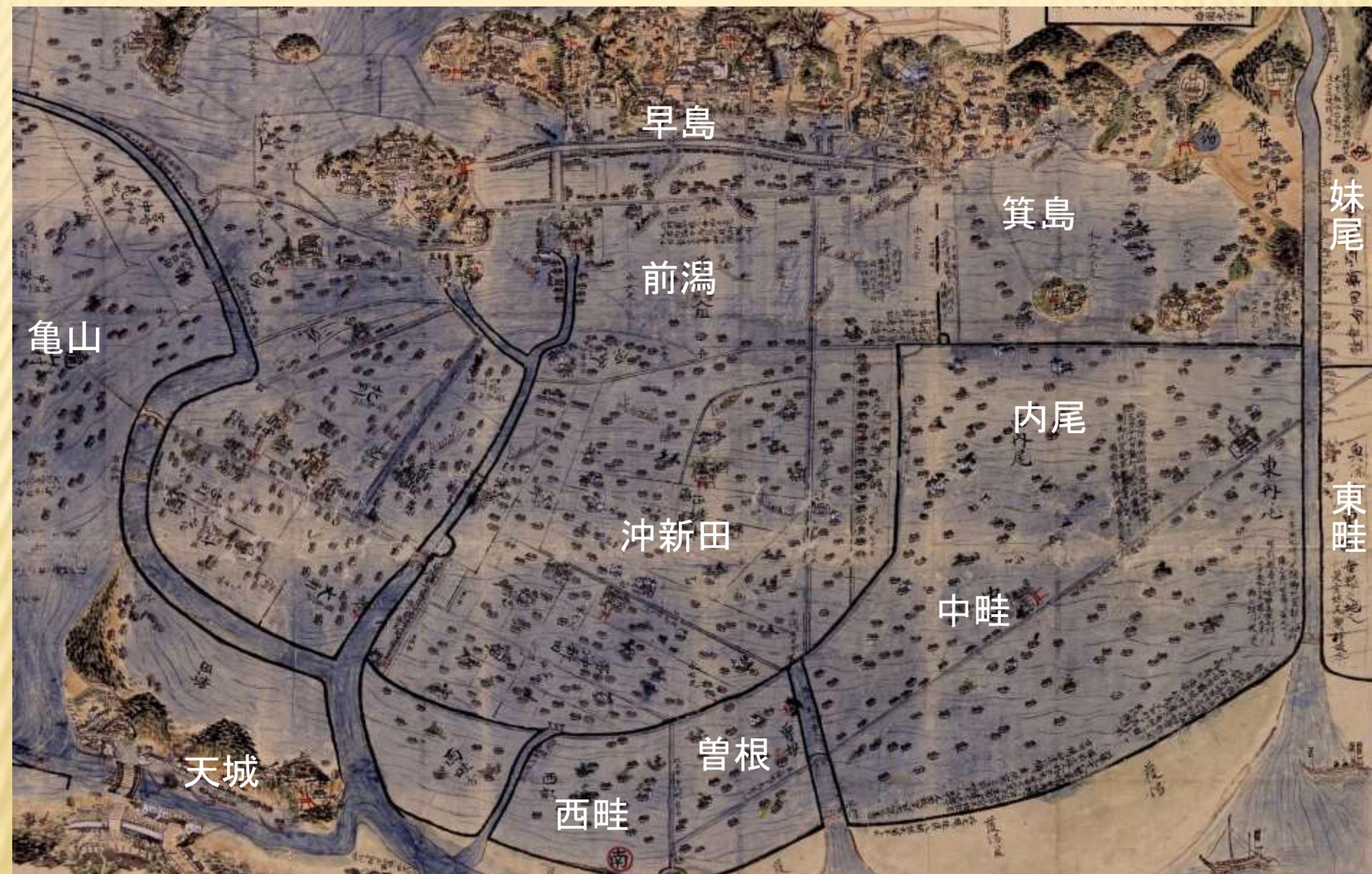
東高梁川跡

1966年 国土地理院空中写真
MCG661X-C3-28

「高梁川嘉永洪水絵図」(早島町
教育委員会所蔵)

川入村名主秋岡惣五郎筆「先考遺筆」によると、6月3日夕は格別に水が増し、生坂・西坂・三田から加勢夫が来て、秋岡は大内西渡場かみを引き受けて杭木を打たせていた。酒津から十明が危なく、人夫を貸してくれと頼まれたが請場も危なく、夫役を分けることは難しかった。倉敷代官藤方彦一郎は酒津へ出張。手代3,4人は堤を廻っていた。夜、安江村の者が来て、堤が切れたので大勢酒津の方へ逃げていった。(『倉敷市史 第五冊』p46～47)





3 倉敷村の豪農商・大橋正直の日記

大橋家：倉敷村で地主と金融業

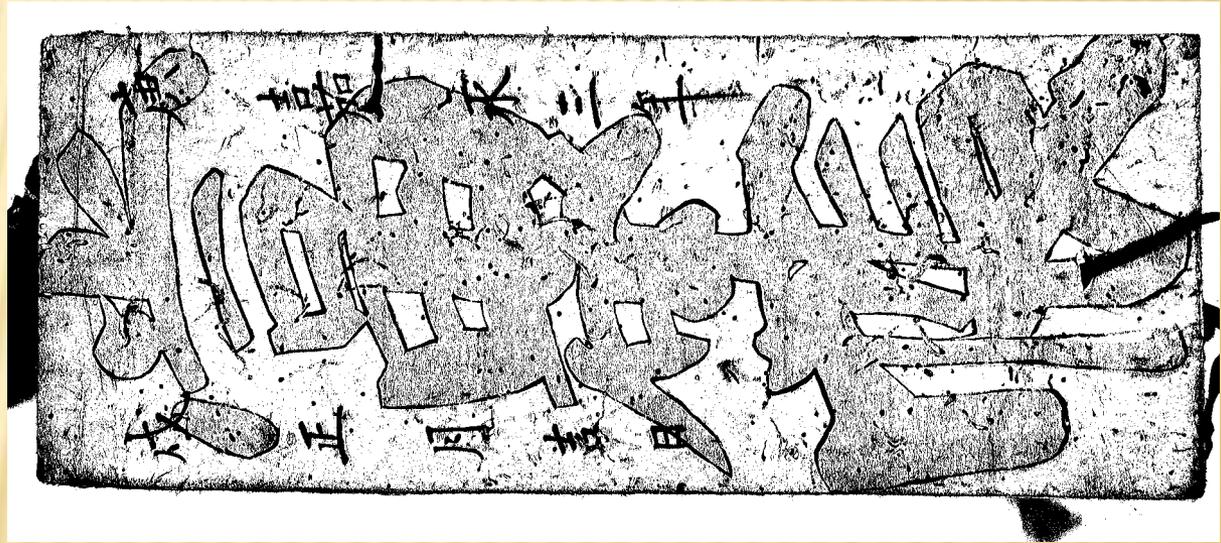
五代平右衛門正直

- ・文化7年(1810)生まれ
- ・文政11年(1828)19歳で倉敷村年寄
- ・天保5年(1834)代官陣屋内に建設された教諭所・明倫館の世話役
- ・嘉永2年(1849)庄屋格年寄
- ・嘉永3年当時庄屋格年寄
41歳



大橋平右衛門正直(七十六歳)(倉敷市所蔵)

・6月3日夕四ツ(午後10時)頃安江村の堤が切れ込み、新田の方が水路になった。天城橋の辺は葦が繁っていて水のさばけ方がよくなく、水口が狭かったので上郷に水が登り、朝七ツ半(午前5時)頃から水が乗りかけ、四ツ(午前10時)頃には溝から水が上がってきた。



(大橋紀寛家文書別1-19-C-63)

六月三日夕四ツ頃安江村堤切込

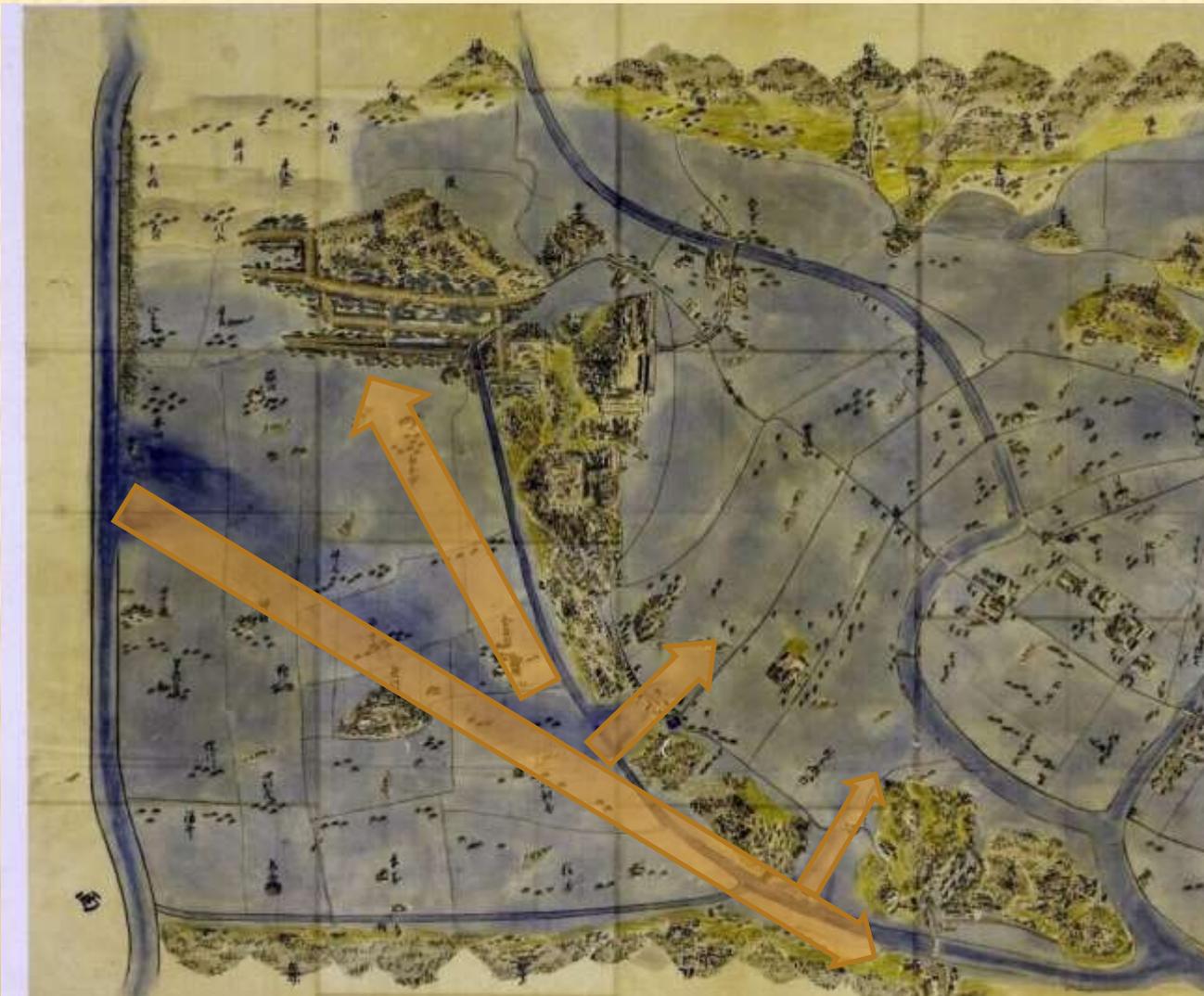
新田ノ方水尾ニ相成、天城橋辺水

さはけ方葦繁ニ付不宜、水口セハク

候ゆへ、上郷ニ水登たれ、朝七ツ半頃方

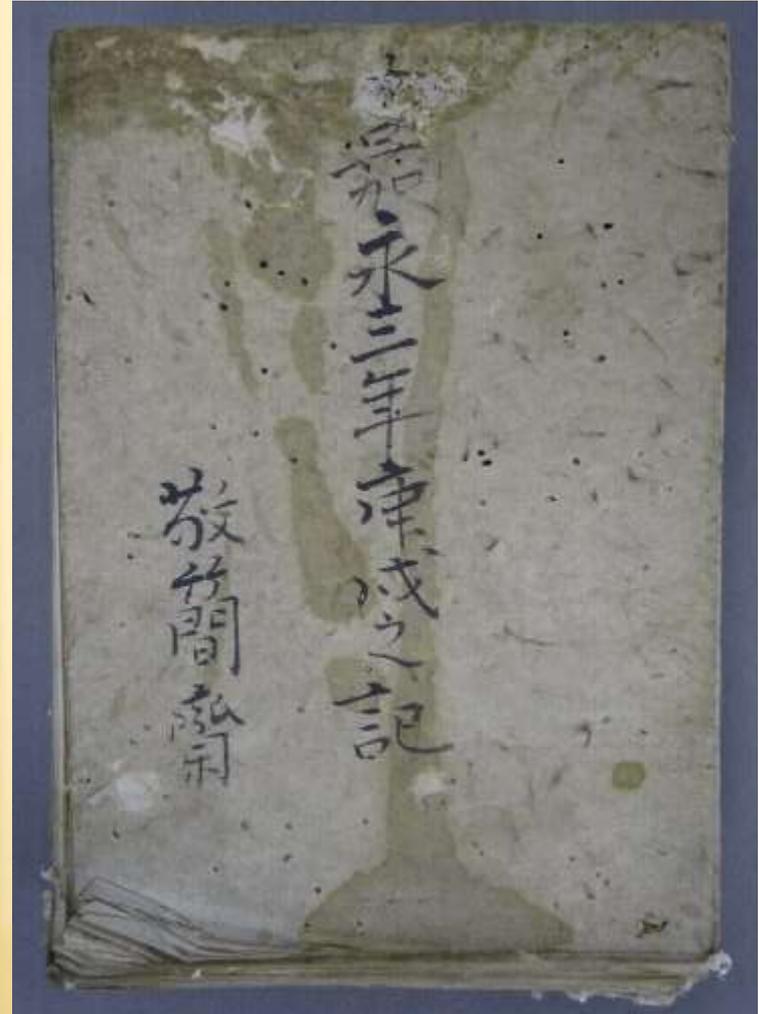
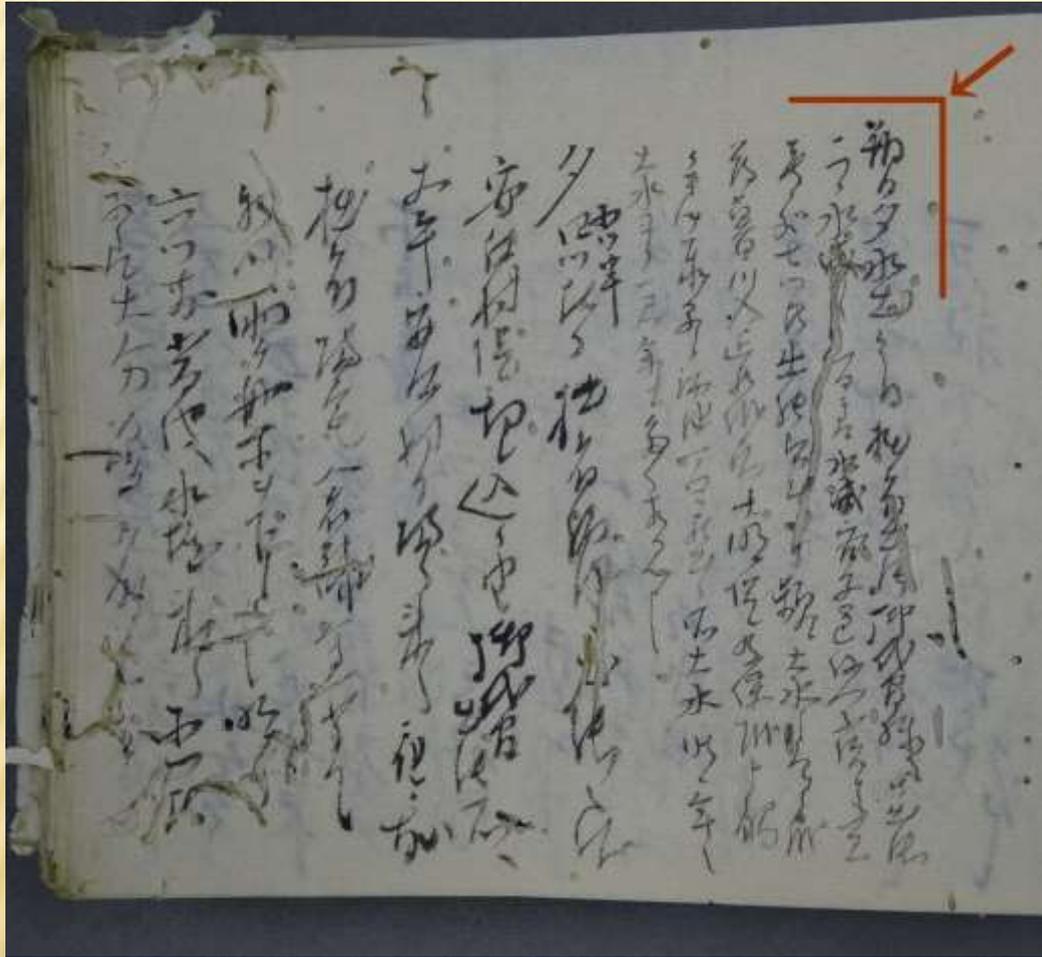
水乗りかけ、四ツ頃溝方上り来り申候、

3 倉敷村の豪農商・大橋正直の日記



嘉永洪水絵図」(倉敷市所蔵亀山
家文書58)

3 倉敷村の豪農商・大橋正直の日記



大橋紀寛家文書別1-19-G-2

- ・6月1日夕に水が出たので大橋平右衛門は出張し、倉敷代官も出張した。
- ・6月2日には水が減った。
- ・6月3日には水が減り、もはや係の役人が詰めなくてもよくなったところ、七ツ(午後4時)頃出張していた勇三郎(倉敷村年寄)から頻りに大水のことをいってきたので、薄暮に川入まで行ったところ、水が十明堤を浸し越したとの申し触れ声を聞いたので早々に酒津一ノ口へ行ったところ、大水は昨々年の大水より1尺(約30cm)余りも多く見えた。

朔日夕水出二付拙者出張、御代官様も御出張
 二日水減「一日」は水減最早懸役人不詰とも宜
 御座候処、七ツ頃出張勇三「頻」大水之旨申越
 薄暮川入迄罷越候所、十明堤へ及浸越申触
 声ヲ承早々酒津一ノ口罷出候所、大水昨々年之
 大水ヨリ一尺余も多く相見申候

・夕五ツ半(午後9時)頃か、大橋平右衛門が酒津へ出張したところ、安江村の堤が切れ込んだことを、(酒津の)代官出張所へ(倉敷村庄屋)丈平が安江村から帰ってきて届けたので、大橋平右衛門は帰宅し倉敷会所で新田助け船などを下した。

五ツ半

夕四ツ頃か拙者酒津口出張候所

安江村堤切し込候由、御代官出張所へ

丈平安江村方帰り来り届候故

拙者帰宅倉舗会所にて

新田助ヶ舟等ヲ下し申候、明「」

- ・(6月4日)六ツ(午前6時)前には当地へ水が来て,五ツ(午前8時)頃には大分深くなった。
- ・当方(大橋家)宅へは水は少しも来なかったが,八間蔵の溝へは水が登った。奥座敷庭へは水1尺(約30cm)ほど上がり,茶園はおよそ座の下まで来た。



大橋家住宅

六ツ前当地へ水湛来り五ツ頃には大分深ク相成「」
当方宅へは水一ツも来不申候へ共、八間蔵ノ溝へは水登り参候、奥座舗庭へは水一尺程上り申候、茶園は凡座ノ下迄参り申候

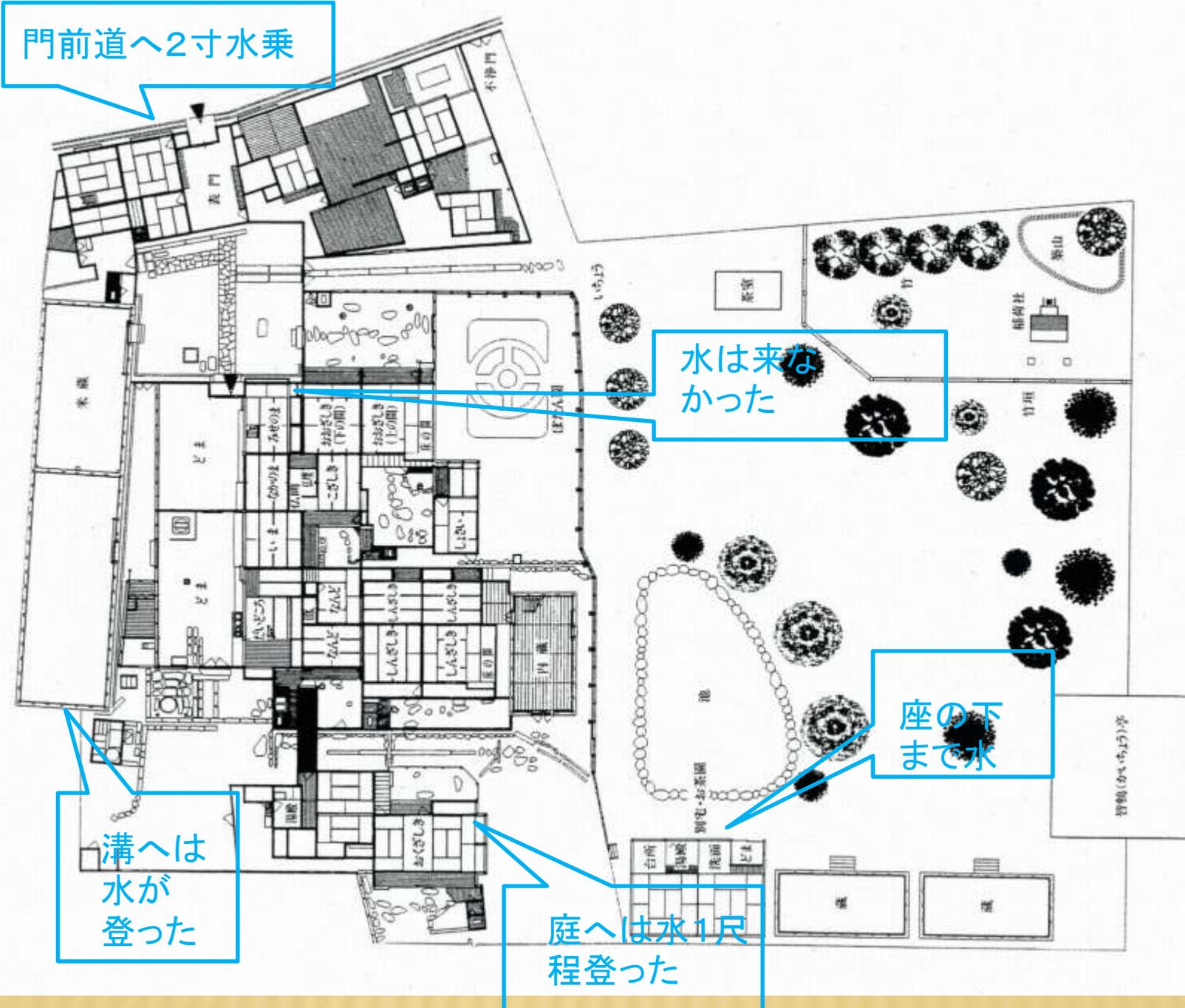


図41 昭和19年(1944)ころまでの大橋家配置図

注：(1)庭園部分は戦争末期空襲時の退避通路にされたが、のちに駐車場に転用された。
(2)「国指定重要文化財 大橋家住宅」より作成。



大橋家住宅



八軒蔵



奥座敷



茶園

- ・本町へは水は少しも上がらず、高札場以下は浸水した。
- ・井上町のこの方(大橋家)茶園の門までは船で渡海し、それよりは水がわずかに上がった。
- ・勝之丞方より西は水が来た。



本町へは水一ツも不上、高札場

方以下ツカリ申候、井上町

此方茶園ノ門迄は舟にて

渡海いたし、夫方は水誠二

ワツカ上り申候、勝之丞方迄

夫方西は水参り申候

「高梁川嘉永洪水絵図」(早島町教育委員会所蔵)



高札場から西

大橋家の茶園が
あったところ



- ・東西両墓所には水は来なかった。1尺程下に(水が)あるくらい地高である。
- ・そのようなことなので、本町と東町だけが人家が無難で、あとは皆山へ逃げ出した。



「嘉永洪水絵図」(倉敷市所蔵亀山家文書58)

東西御墓所水来り不申

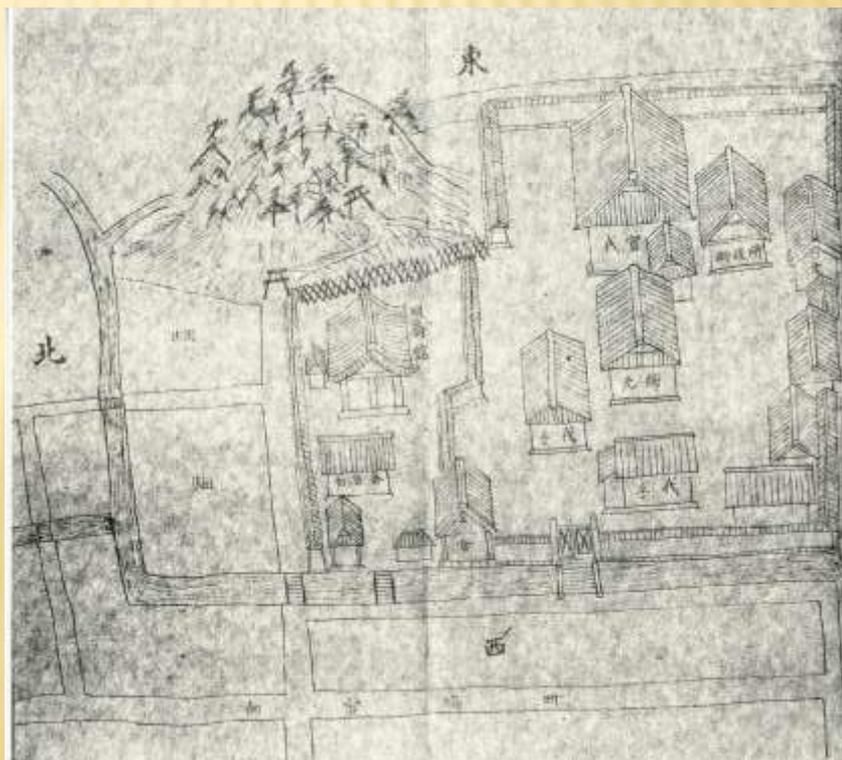
一尺程下二有之位地高二御座候

右二付本町東町丈人家無難

あとは皆山へ逃出申候

御役所角ノ長屋座上ニノリ
御本陣并御役所は地高二付
水庭迄ツキ申候、あと御部屋ハ
皆水ツキ申候、広田清吉様
御宅へは庭へ水入り申位少し
地高也、新川・舟倉はかもし
方下夕式尺程下迄水来り
申候

- ・御役所角の長屋は座上まで浸水し、御本陣と御役所は地高なので庭まで浸水した。あとの部屋は皆浸水した。
- ・広田清吉様御宅へは庭へ水が入ったくらい少し地高だった。
- ・新川・舟倉は鴨居より2尺くらい下まで浸水した。



天保時代倉敷陣屋及
明倫館図(『倉紡六十年史』より)

旧倉敷代官陣屋



旧新川町

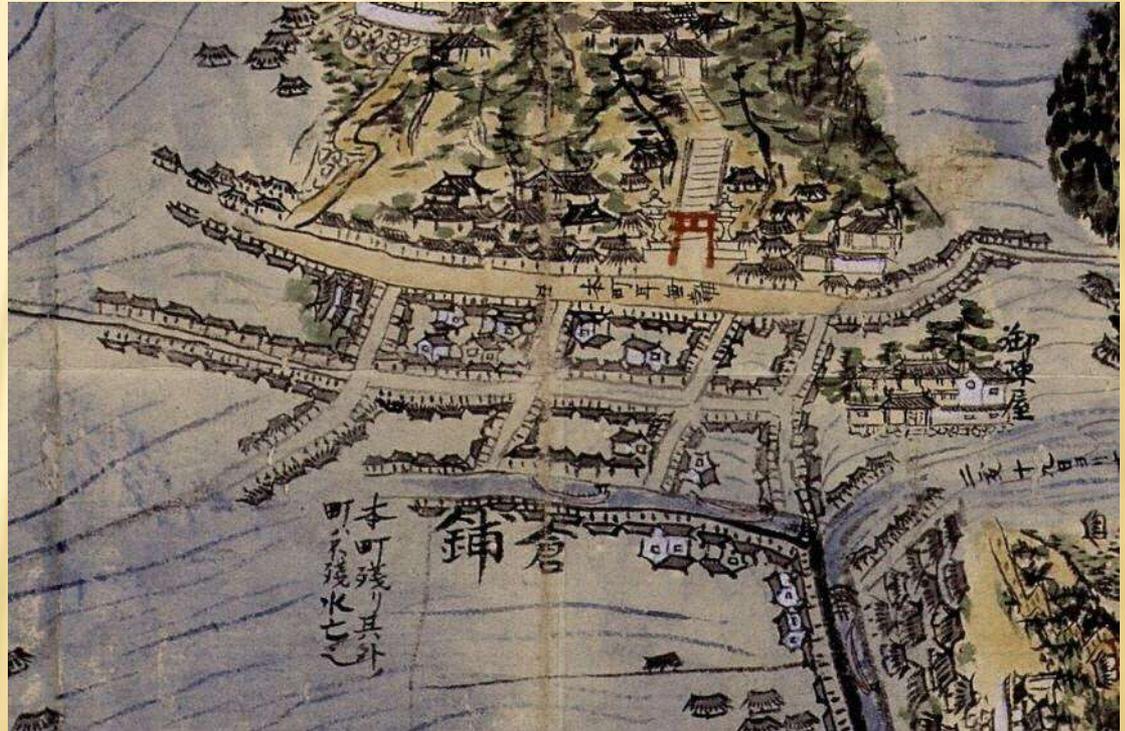


船倉町



- ・会所の座には一杯水が来た。
- ・浜田屋へは水が1尺も切れていた。
- ・井上町は1日座の上へ浸水した。
- ・新宅も座限りに[]
- ・川西町も同様であった。

高梁川嘉永洪水絵図（早島町教育委員会所蔵）



会所座一はい水参り

浜田屋へは水一尺も切れ居申候

井上町は一日座ノ上へ上り申候、

新宅も座限りニ、川にし町も

同様ニ御座候

村会所があったところ



浜田屋があったところ



川西町



旧井上町



- ・4日朝から粥を水沢方で炊き出し、御手代衆が付き添い、新田そのの外山々へ遣わされた。
- ・此方(大橋家)からは握飯を所々へ配った。朝から晩まで米を搗き詰め蒸し詰めても足らなかった。

本四日朝方粥ヲ水沢にて

タキ出し、御手代衆ツキ添

新田其外山々へ被遣候計

此方方はむすび所々へ遣し

申候、朝方晩迄米ヲ

搗詰メ蒸詰メテモ引足り

不申候計

3 倉敷村の豪農商・大橋正直の日記

× 大橋正直の日記

- + 大橋正直の日々の行動と倉敷村中心部の浸水状況，届けられた見舞い品

× 家の記録

- + 「諸日記」「日記」「当座帳」には，水害に関しては，主として大橋家に届けられた見舞い品や大橋家の金銭出納

× 村役人としての記録

- + 「御用書類留」には，水害に関しては，倉敷代官役所から村々への命令，村々から代官役所への報告や願書など，支配をめぐる公式なやりとり

4 被害

- ✕ 安江村堤と四十瀬村境堤決壊で数十カ村が一円湖水を湛えたようになり、人々は銘々大急ぎで直ちに逃げ去り、山林または高いところの堂や宮に集まり、数日をお救いの焚き出しで凌いだ。そのうち川筋が追々減水するに従い、湛水も次第に減り、6月22日に堤の切所の堰止めができたので、安江・沖・倉敷の幕府領3カ村の者は居村へ引き取った。家屋・納屋が数十軒流出または水押潰になり、家財や衣類はもとより食糧として貯えておいた雑穀もことごとく流出した。

4 被害

- × 嘉永3年6月7日 倉敷代官役所から幕府領3力村へ人牛馬溺死怪我，家居流出潰等の取調命令
- × 幕府領の村 嘉永3年7月

	流出家(軒)	水押潰家(軒)
安江村	9	8
沖村		1
倉敷村		30

	総人数(A)	飢人(B)	割合(B/A)
安江村	257	232	90%
沖村	540	432	80%
倉敷村	6,759	4,055	60%

4 被害

- × 流失潰に至らなくても数日深い水に浸かったので四壁が削げ落ち、床回りが大破して建物が用立たず、さしあたり暮らすことができない者がたくさんいた。
- × 幕府領では安江村・沖村・倉敷村は数日の深水場になり稲草はもちろん諸作とも水腐れ株絶になった。安江村・沖村は田畑の水たまりに石砂が入り深荒損地がおびただしくできた。
- × 三カ村とも用水樋・道・橋も傷み、耕作ができず当日を暮らすこともできない者が多くいた。

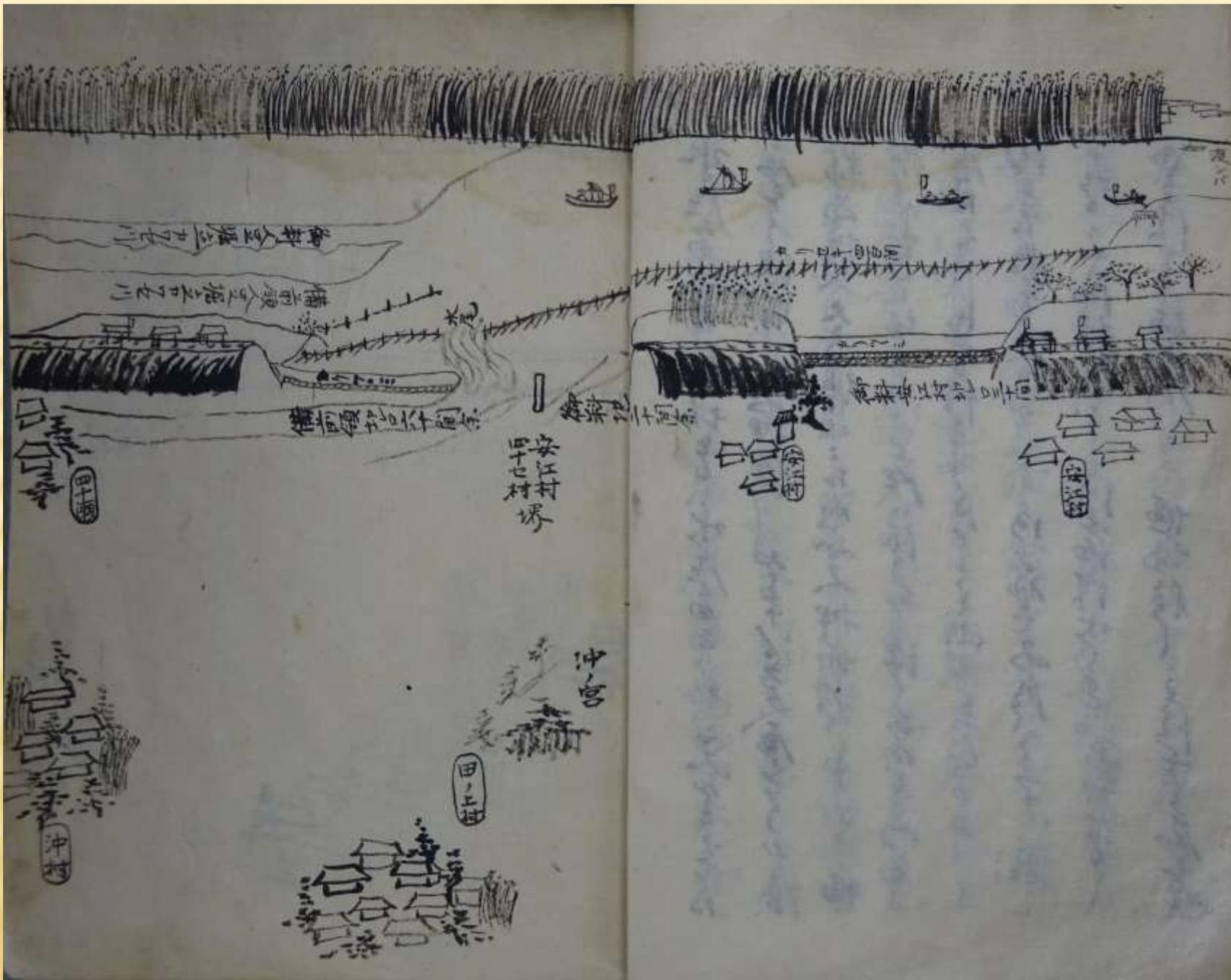
(大橋紀寛家文書Ⅱ－1－A-8「嘉永三年庚戌正月吉日 御用書類留」より)

4 被害

× 人的被害は？

- + 岡山藩領では人や牛馬の死亡・けがはなかった。人々は急いで高台に避難した。日ごろから洪水への心構えがなされていたのではないか。(倉地克直「嘉永三年東高梁川洪水と岡山藩領児島郡村々」)
- + 「如斯のことに候へ共、死人壹人も無之」(「先考遺筆」『倉敷市史 第五冊』p48)
- + 四十瀬村の破堤箇所より下流で、溺死者は一人もいなかった。水死人を見た者も確かにいたが、これは高梁川上流の洪水箇所から流れてきたものと考えられる。(平松勇之介「洪水心得方」『日本農書全集67 災害と復興2』)
- + 幕府領でも人的被害は報告されていない。足高山・日間山・鶴形山・向山等の最寄りの山手へ逃げ上がった。

〔倉敷市所藏難波家文書22-1 嘉永三年戊戌六月大水記録〕



5 復旧工事

- ✦ 安江村の切れ所へは、毎日々々代官の藤方彦市郎が出張し、自分が取り仕切って水の流れる筋を止める御用まで取りかかり、幕府領安江村の分は上の切れ所30間(約55メートル)余り、下の切れ所80間(約145メートル)余りのところ、20間余りは幕府領分で、60間余りは岡山藩領四十瀬村の方である。こうして日々受け持ちの村々ならびに窪屋郡村々から人夫役を出す、行き届かないので、外の郡々へも加勢人足を仰せ付けられた。11日には都宇郡からも800人、浅口郡から800人、そのほか備前領村々残らずおよそ人数3000余人も出し、水を流す代替の川を掘り立て、川中へは荒堰400間(約730メートル)ほど杭柵に畳蕙をひっかけ土俵を築き添え、日々多くの人夫で15日にはおよそ成就した。16日に水の流れる筋を止める手筈で、川上の湛井用水堰所も200人の人夫で堰止めになり、既に幕府領の構の分は、水の流れる筋とも堰止めになったが、岡山藩領の堰場は全体の水の流れる筋止めになって押し切れ、16日はこれで終わった。

5 復旧工事

- ✕ また翌17日取りかかり堰止めたところまた押流し、翌18日なおまた取かかり土俵をおびただしく投げ入れた。おおかた堰止めになったところ、また押し切れますます止まらなかった。幅はわずかに4, 5間(約7~9メートル)だが、底は限りなく深くなったので、いつ止まるか分からない。普請方もくやしがり、術を失ったばかりである。しかし捨て置くべき事でもないのでまた段々と工夫をこらした。

(倉敷市所蔵山内家文書3-11)

岡田藩役場ならびに玉島の丹波亀山藩役場へお掛け合いになり、(上流の字かりまたにある)又串川(西高梁川)・酒津川(東高梁川)の分岐点を堰立てた。この所は宝暦年中裁許があり、双方から小石一つも手入れすることはできない旨の裁許の場所ではあるが、この度のことは特別な究極の国変の事なので、そのことを交渉した。もっとも水の流れる筋を止めしだい早々取り払い、もしまた急雨等があり、西川(又串川)の堤が保ちがたいほどのこともあれば早々取り払いの規定で、堰立てた。



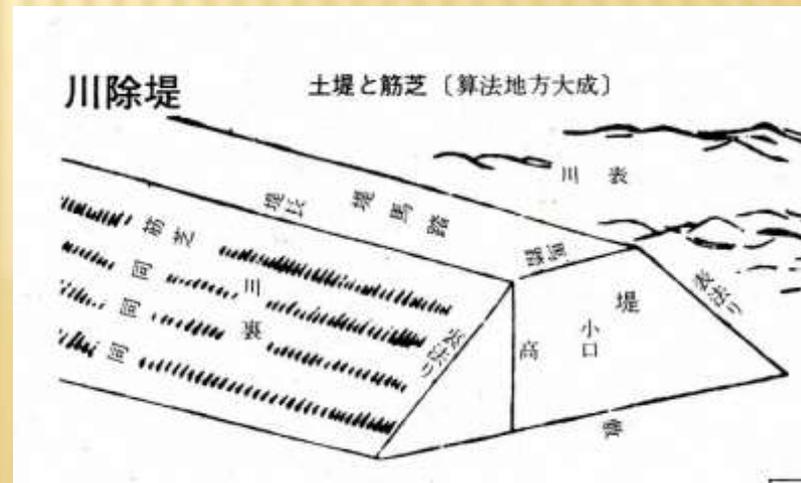
5 復旧工事

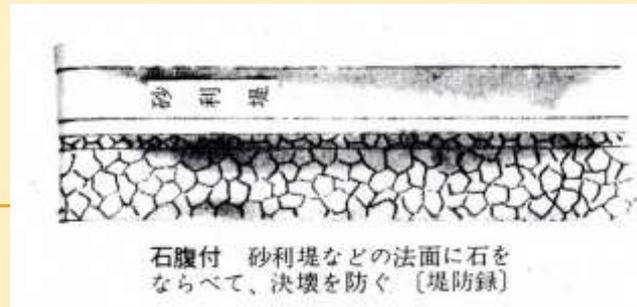
- × これにより安江・四十瀬の切れ所は一滴の水も流れず砂原になり、同夕に終夜堰止め直に仮堤まで成就しようとするところに、また20日晚より大雨終夜やまず、21日朝まで大雨で、再度堰切れまたまた倉敷辺まであわてふためいたが、この度は水嵩4尺(約120センチメートル)ほどで、ほどなく引き落とした。それぞれ日々普請を行い6月晦日ころには仮堤がことごとくできたが、7月朔日(1日)またまた大雨で川が一段と増水し、すでに仮堤が危く早朝から代官が出張し、当日昼夜通しに土砂を運んだ。それより段々本堤に取り掛かり、7月中には幕府領・備前領ともことごとく普請ができた。人夫は数知れない。もっとも幕府領の方は私領方からの加勢人足等をそれぞれ取り調べるようとの指示があり、一々取り調べ帳面にまとめ差し出した。(倉敷市所蔵難波家文書22-1「嘉永三年戌六月大水記録」)

5 復旧工事

- × 工事経費見積り(嘉永3年7月6日)
 - + 堤切所堰留その外諸入用 500両ほど
 - + 本堤築立諸入用 1300両ほど
- × 倉敷代官役所から安江村本堤御普請入用1300両のうち倉敷村の身元相応な者32人へ7月に590両の立替金を命じられ、村内で分担を決め7月10日、20日、晦日の三度に分けて上納。
 - + 大橋平右衛門 138両
 - + 水澤遠三郎 138両
 - + 植田武右衛門 80両
 - + 金平 28両
 - +
- × (大橋紀寛家文書Ⅱ-1-A-8
- × 「嘉永三年庚戌正月吉日 御
- × 用書類留」より)

(図録 農民生活史事
典『柏書房、一九七九
年、より)





5 復旧工事

× 嘉永4年，酒津村・安江村の御普請所の川除堤へさらに上置・石腹付・石柵・杭柵等の普請を水下村々が自普請することを代官役所へ願い出，出役が見分のうえで実行。12月14日完成。

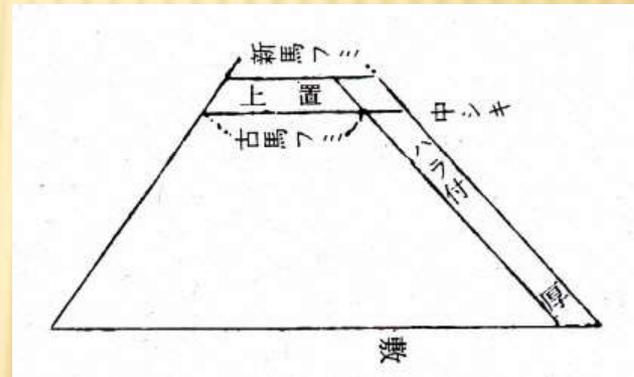
+ 5月に倉敷村の身元相応の者32人が355両を出金

- × 大橋平右衛門 83両
- × 水澤三保太郎 83両
- × 植田武右衛門 48両
- × 金平 17両
- × ……

+ →水下村々が入用銀

+ 倉敷村は7月14日に酒津・安江堤普請入用銀として9貫目を支出。植田・水澤・大橋が立替。

× (大橋紀寛家文書Ⅱ-1-A-9「嘉永四年辛亥正月吉日御用書類留」より)



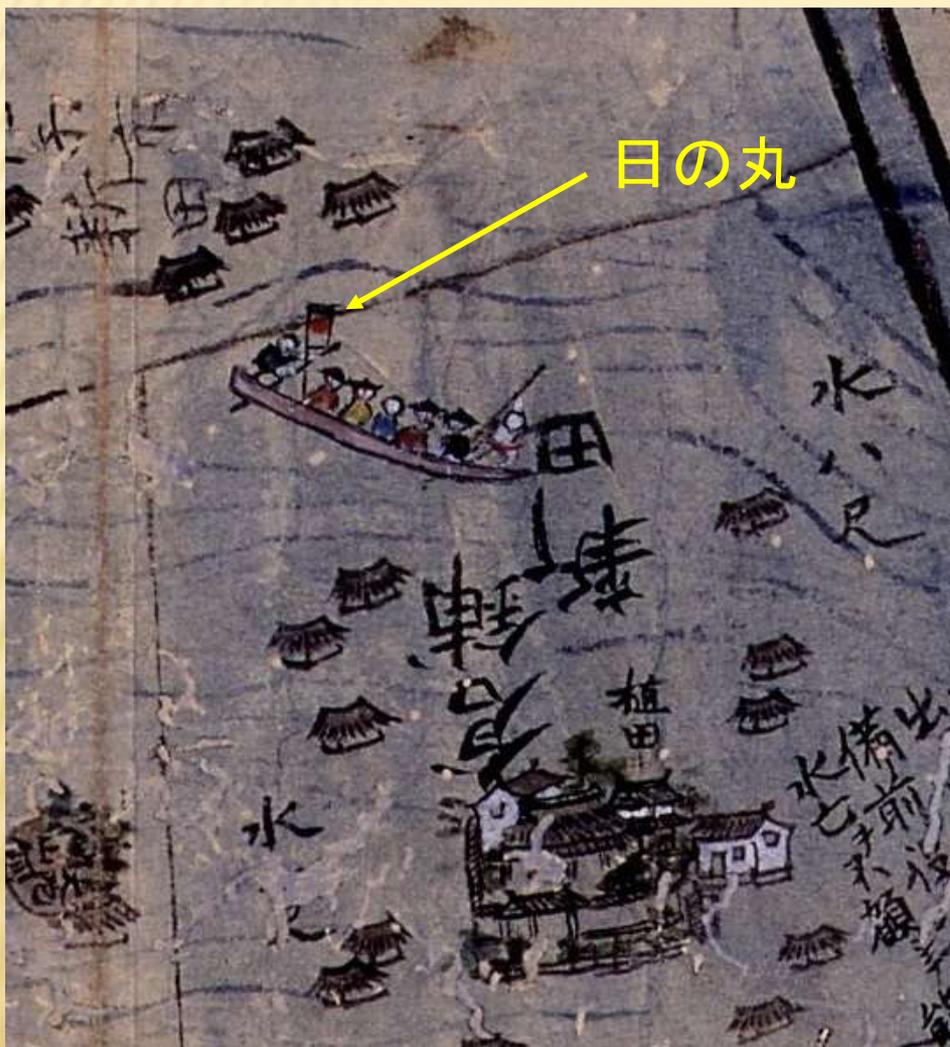
6 救恤



倉敷新田・沖村等の飢人へ6月5日～13日, 6月20日～23日まで御救いとして1人前白米1合5勺を握り飯にして水沢三保太郎方へ炊き出しを命じられ, 役所からも出役が1人ずつ出張して指図があり, 飢人へ配当役は郡中惣代年行司が命じられた。日々手分けして倉敷村観龍寺・長連寺・教善寺境内, 日間山等へ配った。

「高梁川嘉永洪水絵図」(早島町教育委員会蔵)

6 救恤



居宅を守っている者へは、船2艘で日の丸御用幟を立て、水に浸かっている家へ配った。(倉敷市所蔵難波家文書22-1「嘉永三年戌六月大水記録」)

「高梁川嘉永洪水絵図」(早島町教育委員会所蔵)

6 救恤

- × 倉敷村の水沢三保太郎は逃げた飢人たちを救うため焚き出しを命じられ所持の白米24石5斗4升4合を立て替えた。
- × 嘉永3年7月に、急場の食糧として村貯穀(米・粳・麦・稗)を借用し、飢人へ渡し、当分しのいだ。
- × 嘉永3年7月に、水押潰家の者30人へ代官から金1歩(100疋)ずつ下付された。
- × 嘉永3年8月に、安江村・沖村・倉敷村で金500両(道橋修理、極難渋者の手当等のため)の10年賦(返済は5年後から1年50両ずつ10年で返済)借り上げを代官役所へ願い出た。→10月借り上げが命じられた。
- × 嘉永3年11月、窪屋郡の幕府領村々が安石代銀で上納を代官役所へ願い出た。

(大橋紀寛家文書Ⅱ—1—A-8「嘉永三年庚戌正月吉日 御用書類留」より)

6 救恤

- ✕ 嘉永4年3月18日 倉敷代官佐々井半十郎が倉敷役所へ幕府領・私領の村役人を呼び出し、村々が堤切所の仮水留そのほか防方に働いたことを奇特として褒美に幕府領村々へは鳥目(銭)70貫文、私領村々へは30貫文を下付することを老中へ伺いのうえ勘定奉行が代官へ申し渡し、代官が村々へ申し渡した。
- ✕ (倉敷市所蔵難波家文書22-1「嘉永三年戌六月大水記録」)
- ✕ → 倉敷村へ25貫838文
 - + 各町へ配分した後、各町惣代が小前へ配分。
- ✕ (大橋紀寛家文書Ⅱ-1-A-9「嘉永四年辛亥正月吉日 御用書類留」より)

6 救恤 倉敷義倉からの支出

× 嘉永4年の義倉勘定

- + (A) 収入銀40貫403匁3分
- + うち難渋人助勢に銀10貫30目4分8厘を支出, その他の支出と併せて(B) 銀12貫970目2分9厘2毛を支出 (救恤に義倉財産の4分の1を支出)
- + (A) - (B) 残銀27貫433匁6厘8毛
- + 嘉永3年の残銀38貫162匁9分8厘に比べ大幅減
- + (倉敷市所蔵倉敷義倉文書2-9「義倉会計帳」)

6 救恤 倉敷義倉からの支出

× 多額の救恤関係支出をした年

	A収入(匁)	B救恤関係支出(匁)	B/A	原因
天明4年	40,399.15	14,686.42	0.36	天明の飢饉
文政12年	98,539.19	14,257.112	0.14	米穀高騰, 疱瘡流行
天保5年	77,563.98	17,391.34	0.22	天保の飢饉
嘉永4年	40,403.3	10,030.48	0.25	嘉永3年の洪水

(倉敷市所蔵倉敷義倉文書2-2, 2-8, 2-9)

7 おわりに

- ✕ 嘉永3年5月末から雨が降り続き、6月1日に堤防が決壊して現在の真備地区と軽部が浸水。6月2日、3日は東高梁川の水が減ったが3日夕から急に増水し安江・四十瀬の堤防決壊。
- ✕ 倉敷村中心部は本町・東町のみ無事で、ほかは場所により深さは違いますが浸水した。新川・舟倉は鴨居から2尺下まで。
- ✕ 復旧工事(御普請)では方針を決めるのは幕府・諸藩の役人。費用の立替や会計処理では代官役所は倉敷村や地域の豪農商に依存。嘉永4年 御普請から自普請へ。地域の村々の依存関係。豪農商からの出金を呼び水に出銀。
- ✕ 救恤の実施主体は村や地域の豪農商。代官役所は救恤の実施でも地域の豪農商に依存。ただし村は拝借金を代官役所へ依存。
- ✕ 近世後期には地域の豪農商は費用の立替えや救恤をしなければ小前の理解を得られない時代になっていた。
- ✕ 領分の違いを超えて幕府・諸藩の役人と町や村の人々が相互に依存し協力して災難を乗り越えた。